

## 特集：多賀里の駅・一圓屋敷の取り組みから

# 多賀らしい景観と地域づくりを考えよう

### けしきをつくるもの（1）平居 晋さん

7月4日(土)、多賀里の駅一圓屋敷で開かれた集いでは、20人ほどの前で多賀在住の建築家、平居晋さんが「けしきをつくるもの1」と題して話題を提供された。

平居さんは、A・SITE という設計事務所の代表だが、「藝やcafe」を経営し、音楽イベント、デザインなどにも関わる魅力的な人で、「多賀里の駅」の看板のデザインも手がけている。

この日は、「多賀のけしきをつくっている納屋や野小屋」の紹介から始まった。納屋、野小屋は、田畑や山林の作業のための建物で、普通の人



が必要な機能として作ったシンプルな形があり、そこに「多賀らしさ」があるという。小屋は、耕地の隅にあり、その位置で地形がトレースできる。また、同じ理由で、樹木と小屋のバランスのよい風景となる。さらに、使われている木の板やトタン板が古びてきて独特の風合いが出てくると、写真を見せながら力説された。

次に、平居さんが紹介したのは、シーランチの景観だった。シーランチは、米国・西海岸にある海沿いの別荘地で、強い風が吹き付ける荒地である。

ここでは、人の生活や自動車の姿を外に見せてはならない。覆い隠すための塀や建物の外部材は地元



の杉材を使わなければならないという取り決め(デザインコード)がある。岬の荒々しい自然景観を守るため、この地にあった



納屋をデザインの基本にしたという。

シーランチに影響を受けた平居さんは、彦根や多賀で、風景になれる建物を作りたいと願うようになった。



最後に彼が見せてくれたのは、自らが設計したアイ・ビーンズ・コーヒーの店舗と、アイ・コラボレーションの事務所だった。どちらも多賀にある1階建ての建物で、ガルバリウ



ム鋼板を外壁に使い、小屋を思わせる。しかし、商業施設だけに「おもてなし」の造形や表現がされ、センス良く仕上がっている。



ただ、景観としてみると、ガルバリウム鋼板は白



く輝き、周囲の風景とは合わない。だが、道路を挟んで反対側にも白い箱型の2階建てがあり、

背景となる山の稜線を遮っているが、この建物は遮っていないことがわかる。

私たちは「多賀らしい景色」について、ぼんやりとイメージしている程度で、「これが多賀の景色」と合意できるものを持っていない。京都の鴨川、大文字、嵐山のような「多賀の景観イメージ」をぜひ発掘し、みんなで鑑賞し、公表したいと思った。



7月：トマトのグラタン、夏野菜の揚げ浸し、きゅうりの冷汁、三度豆の梅肉和え、赤米ごはん、ミニトマトの寒天寄せ、

## 水谷に暮らして 谷 涼香さん

9月5日(土)、多賀里の駅の集いは、多賀町水谷(すいだに)地区地域おこし協力隊の谷 涼香(すずか)さんが、地域づくり活動について報告されました。

谷さんは、1991年生まれ、滋賀県出身で滋賀県立大学でデザインを専攻され、2014年、多賀町の地域おこし協力隊に応募して採用され、水谷集落に住んで2年目を迎えています。契約期間は3年で、現在、活動しているのは、谷さんと山下政満



さん(大阪府出身)、2015年から石栗義男さん(新潟県出身)が加わっています。

多賀町水谷は、多賀町北部の山間の谷にあります。ダムによって水没する予定でしたが、2009年1



月に建設が中止され、老朽家屋の改修や合併浄化槽の整備、道路の拡幅、圃場整備など

が、一気に進んでいるところです。

一方、集落は、29世帯約40人と人口が減少、高齢化が進み、50代の夫婦が一番若く子どもは一人もいません。また、上水谷と下水谷の間でもあまり交流がなく、谷さんによれば、集落コミュニティの力が弱くなっているそうです。

施設面での暮らしの改善は急速に進んでいますが、ソフトな面で暮らし方やコミュニティの活動を支えることが、谷さん達の課題です。



谷さんたちの1年半の活動が紹介されました。

1、**むらづくり懇話会**：月に1~2回、村の今後の活動などについて話し合います。協力隊が事務局を担当しています。

2、**米づくり**：隣の笹尾集落の耕作放棄地を借りて米作りをしました。7畝しかない水田ですが、集落の人たちとみんなで作業し、新米を試食し、多賀ふるさと楽市で、おにぎりを売っています。

3、**村のにぎわいづくり**：

●**コンニャクいも栽培** 獣害に強いと聞き、栽培を始めて2年目です。滋賀県立大学の学生グループ・Taga-Town-Projectが応援しています。

●**あかしそ栽培** 県南部の比良に見学に行った際、獣害に強いと勧められ栽培しています。あかしそジュースにしたいそうです。

4、**獣害対策**：シカ、サル、イノシシ、ハクビシンなどが作物を荒らすため、畑や田を囲う対策が必要で、村の最大の課題です。谷さんは、狩猟免許を取得して罾を仕掛けていますが、住民の力だけでは対抗できない課題です。

5、**サロン**：集会所で毎月1回、住民が交流する場を設けています。工作や草もちづくり、流しソーメン、花見ツアーなど、協力隊が企画や運営を手伝っています。(続)

